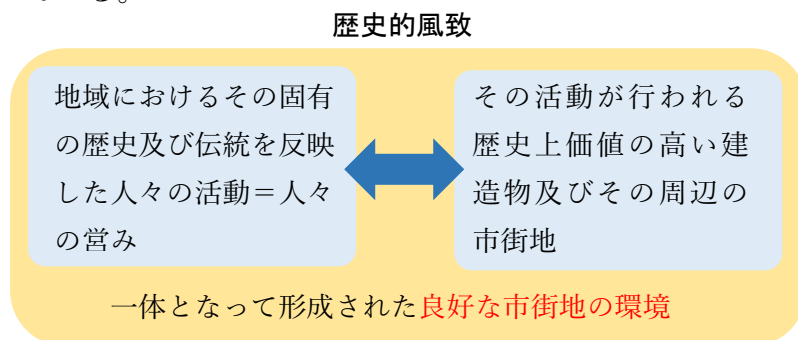


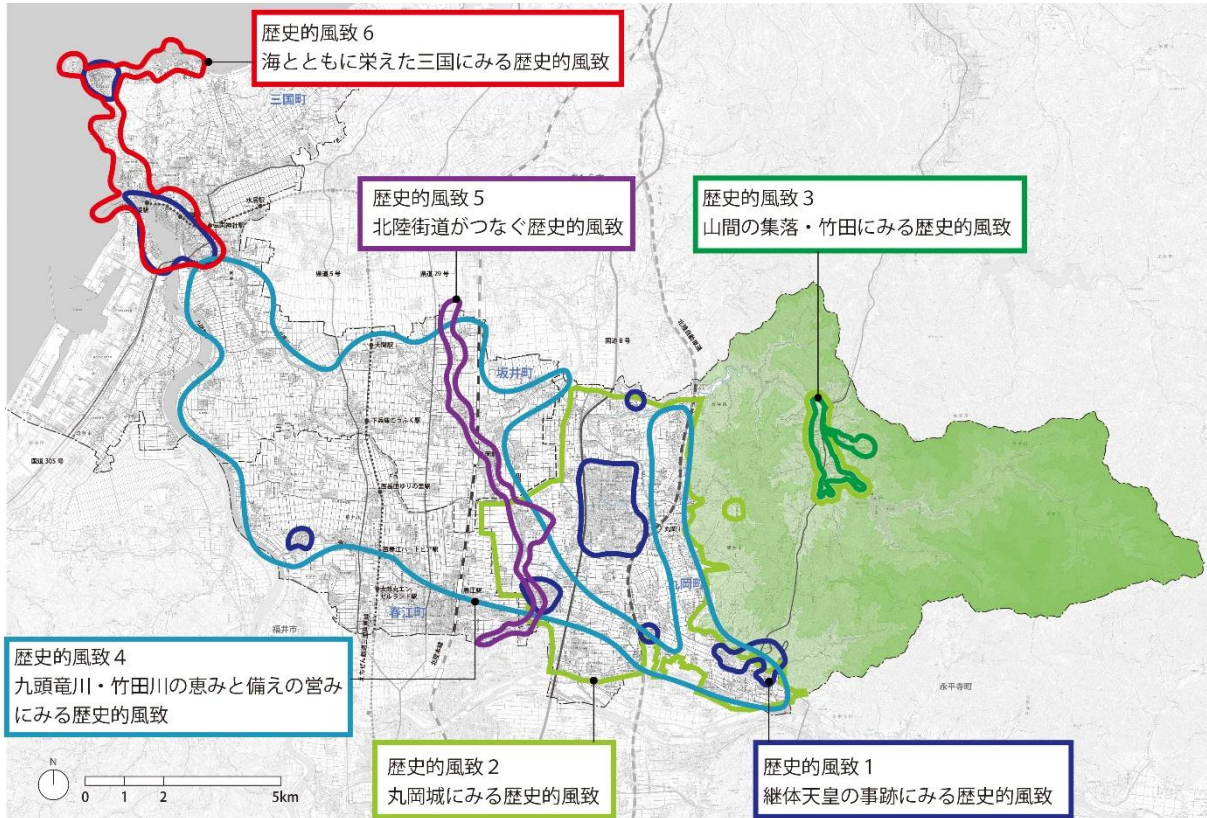
## 第2章 維持向上すべき歴史的風致

「歴史的風致」とは、平成20年に公布・施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）」第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

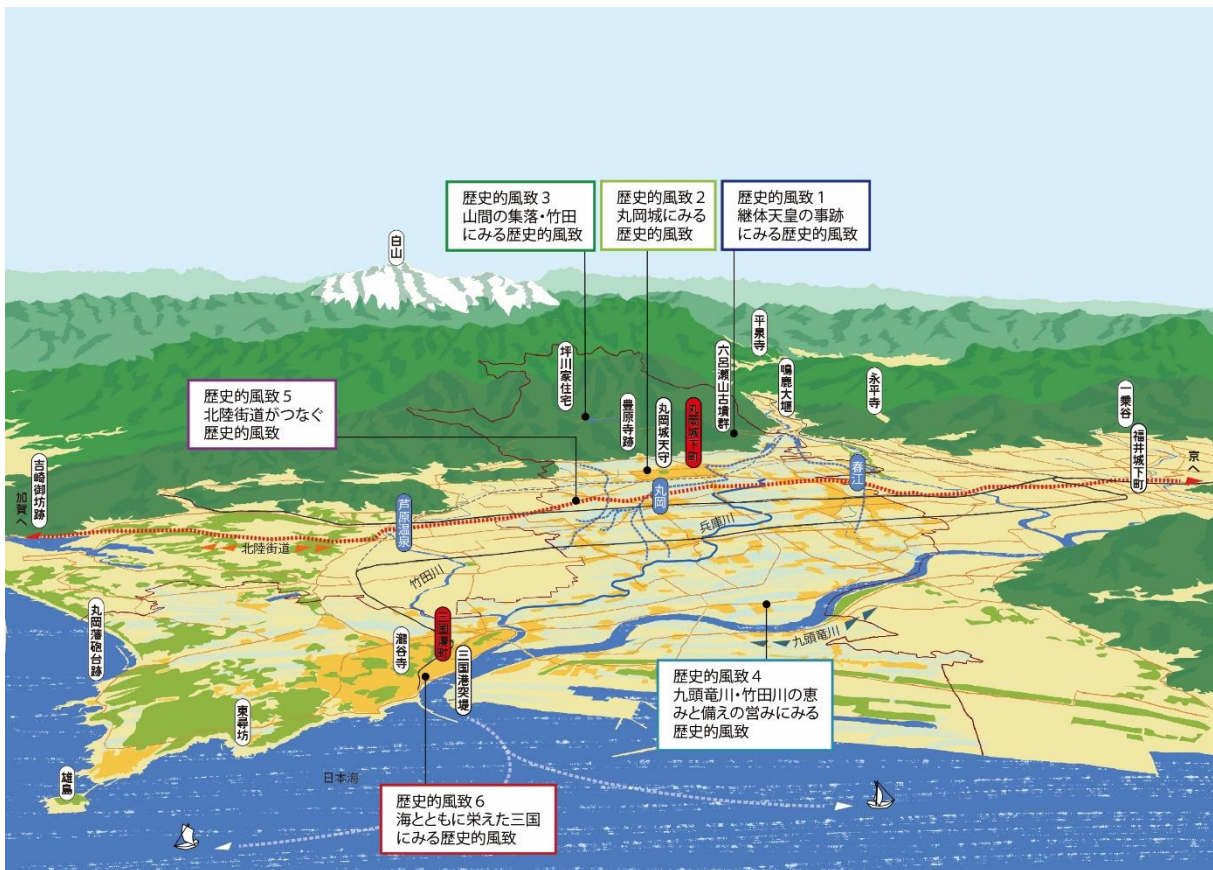


坂井市における維持・向上すべき歴史的風致は次の通りである。

1. 継体天皇の事跡にみる歴史的風致
2. 丸岡城にみる歴史的風致
3. 山間の集落・竹田にみる歴史的風致
4. 九頭竜川・竹田川の恵みと備えの営みにみる歴史的風致
  - 4-1. 豊かな水の恵みにみる歴史的風致
  - 4-2. 九頭竜川の治水にみる歴史的風致
5. 北陸街道がつなぐ歴史的風致
6. 海とともに栄えた三国にみる歴史的風致
  - 6-1. 漁業を中心に栄えた三国にみる歴史的風致
  - 6-2. 北前船の栄華を今に伝える三国祭にみる歴史的風致
  - 6-3. 地元の踊りと唄にみる歴史的風致
  - 6-4. 瀧谷寺にみる歴史的風致



歴史的風致の分布図



坂井市全域を日本海側からみた歴史的風致分布のイメージ

### 1. 継体天皇の事跡にみる歴史的風致

#### □継体天皇の事跡

坂井市においては、継体天皇に関する伝承が市域で伝わり、市内にはゆかりの地が点在している。

坂井平野を一望する丸岡町東部山麓・低丘陵、海上交通の要所である三国町の北部沿岸域には大規模な古墳が分布している。なかでも卓越した規模を誇るのが東日本の日本海側最大級の古墳である六呂瀬山古墳群<sup>ろくろせやま</sup>である。対岸の松岡古墳群（永平寺町）と並び、眼下に九頭竜川が形成した坂井平野を一望できるこの古墳群からは、当地域を支配下に置いた越前最高位の勢力の存在を見て取れる。

この地に登場したのが、近江で生まれ越前で育ったとされ、当地の資源と生産力、そして類稀<sup>たぐいまれ</sup>な対外交渉力を背景に強勢を誇った継体天皇である。古墳時代の歴代の王たちによる統治は、継体天皇によって九頭竜川河口の開削が行われ、かつて瀉湖<sup>せきこ</sup>であった坂井平野の沼沢地の洪水対策、稲作の発展、舟運の便がはかられたという伝承となって今日に伝わっている。市域全域で、継体天皇やその母・振媛<sup>ふりひめ</sup>の伝承が伝えられる場所が多く残っている。

坂井市内には継体天皇ゆかりの神社や伝承の地が点在している。神社では、継体天皇や振媛などを祭神とし、また、伝承を守っている。それぞれの神社等は地区で大切に継承され、緑豊かな社叢等は地区を象徴する景観を形成し、また、祭礼が行われている。継体天皇の伝承が、地域の人々の心のよりどころとして、慕われ、地域で大切にされ、現在まで継承されている。

### （2）建造物と活動

#### ①三國神社

##### ○概要

祭神は大山咋命<sup>おおやまくいのみこと</sup>と継体天皇である。

『延喜式神名帳』に「三國神社」が記されている。継体天皇が治水排水事業のために高向から移り、この地に滞在したことから、継体天皇の崩御後、朝廷より神霊を鎮め祀られたのが三國神社の始まりという伝承が伝えられている。

現在の三國神社は、天文9年（1540）、湊の住人・



三國神社拝殿

板津清兵衛が高柳村より流れて来た御神体を拾い上げ正智院に納めたのに始まる。天文13年（1654）院主・澄性小社が建立される。さらに、永禄7年（1564）澄性の弟子・澄元國中を勧進し、桜谷を開き、社地を開発・山王宮を建立する。この山王宮の祭神が先に高柳村より流れ来た御神体・大山咋命（山王権現）である。

明治4年（1871）山王宮を桜谷神社と改める。明治5年（1872）興ヶ丘にあった、水門宮の御神体・継体天皇を桜谷神社に合祀をする。さらに、明治18年（1885）に三國神社と改称した。

### ○三國神社に関わる建造物と活動

#### [建造物]

隨身門（県指定有形文化財）は、三間一戸楼門形式、入母屋造、銅板葺の建物である。元治元年（1864）に建設を開始し、明治3年（1870）に竣工した。

#### [活動]

三国祭（県指定無形民俗文化財）は毎年5月19日から21日まで行われる三國神社の例大祭である。巫女、まとい、武者、獅子、太鼓、鉾、旗など神社関係一行と大小の神輿を中に挟み、合計6基の山車<sup>やま</sup>が三國神社鳥居下から順に町内を一日かけて巡行する。

※詳細は「歴史的風致6 海と共に栄えた歴史的風致」を参照

## ②大湊神社

### ○概要

『延喜式内帳』にその名が見られる古社である。白雉年間（650～654）勧請と伝えられる古社である。

祭神は事代主神・少彦名神等で、三保大明神（三尾大明神）とも号せられ、三尾君の祖神とも伝えられている。三尾君は、三尾大明神とも号せられる土地の豪族であり、継体天皇の母である振媛の一族とされている。



大湊神社拝殿

## ○大湊神社に関わる建造物と活動

### [建造物]

大湊神社本殿（県指定有形文化財）は、桃山様式の柱を持つ一間社流造、桁行1.8m、梁間1.5m、柿葺きの小社殿。元和7年（1621）に造立された。

大湊神社拝殿（県指定有形文化財）は、桁行1.8m、梁間1.5mの一重入母屋造りで、銅板葺の床板張りに作られている。本殿と同様に、元和7年（1621）に造営された。

### [活動]

雄島祭は、大湊神社最大の行事として毎年4月20日に開催される。船神輿が区内を巡行する。

※詳細は「歴史的風致6 海と共に栄えた歴史的風致」を参照

## ③<sup>たかむく</sup>高向神社

### ○概要

祭神は継体天皇と振媛命である。

「古堂様」とも呼ばれ、振媛命一族の氏神であり、高向郷の総社であったと伝えられる。式内社である高向神社に比定される古社だが、明治3年（1870）に國神神社に遷座され、明治19年（1886）に合祀された。後に、現在地に遷後された。

5世紀半ば、近江国に住んでいた応神天皇の子孫とされる彦主人王は、越の三国から振媛を妃として迎えた。彦主人王の死去後、振媛は高向郷に帰り、継体天皇を養育したと『日本書紀』（養老4年（720））にある。このあたりが高向の郷と推定され、神社境内には、高向の宮跡として石祠が祀っている。



高向の宮跡

### ○高向神社に関わる建造物と活動

#### [建造物]

社殿は、昭和23年の福井地震で倒壊し、昭和55年（1980）に再建されたものである。境内には、大正15年（1926）の建立が刻まれた灯籠がある。

#### [活動]

現在、4月17日、9月17日に祭礼が行われ、高田区の住民が参拝に詰まる。境内には装飾が施され、社殿には旗が掲げられる。神主が祝詞を読み上げ、お祓いを行った後、参加者が一人ずつお参りをし、神主の話聞く。区長よりお神酒、赤飯をお供えするとともに、参加者に配る。

祭礼の実施については、『丸岡めぐり（S33）』にも記録されている。



高向神社社殿（祭礼時）



高向神社祭礼の様子

### ④<sup>ふくろ</sup>布久漏神社

#### ○概要

創建年代は不明だが、延喜式式内社である。

継体天皇の皇女、<sup>まるやひめのみこと</sup>円媛命が当地に在留して継体天皇の治水事業を受け継ぎ、現在の十郷用水の礎を造ったと伝えられている。円媛命が、応神天皇と神功皇后を祀り、土地の名をとり、布久漏神社と名づけたことが創建であると伝わっている。円媛命は、この土地で逝去した。



布久漏神社

### ○布久漏神社に関わる建造物と活動

#### [建造物]

福井震災で倒壊し、本殿・拝殿等は昭和38年に再建された（石柱に再建年が刻銘されている）。

#### [活動]

布久漏神社の祭礼は9月14日に行われる。円媛命が亡くなったといわれる旧暦の8月14日に行われていたという説もある。現在は、9月14日以降の土曜日に行われている。例祭では、神事として、ひょうご表見の米こめ（県指定無形民俗文化財）が行われる。米を搗き、蒸して神前に供える。残った米を団子状に丸め、参拝する人々に配布し、残った米は翌朝、一升榼に入れて、地区を回って配る。



社殿前で礼拝を行っている様子

※詳細は「歴史的風致4 九頭竜川・竹田川の恵みと備えの営みにみる歴史的風致」を参照

### ⑤國神神社

#### ○概要

式内社で、祭神はまるこのおうじ梶子皇子である。

継体天皇が、まだ皇子で、この地方に在住していたとき、やまとひめ倭媛との間に二男二女があった。その第二皇子が、地名にちなんで梶子皇子といい、その産湯を胎衣と共に岡の東のふもとに埋めて、神明宮とされた。岡の周囲にできた集落が里丸岡村である。その後、天正4年（1576）に柴田勝豊が豊原から城を移すにあたり、この神明社を今の境内に移し、社領を寄進した。



國神神社

#### ○國神神社に関連する建造物と活動

#### [建造物]

昭和23年（1948）の福井地震により建物はすべて倒壊焼失したが、社殿、宝物殿、玉垣等が再整備されている。福井地震前の建造物としては、境内には明治4年（1871）の建立年が刻まれた常夜灯や明治30年（1897）の建立年が刻まれた門柱な

どがある。

### [活動]

國神神社では、春祭4月15～16日、秋祭10月15～17日が行われている。神社での神事後、丸岡五十四町内の各家々を廻ってお祓いをする宅神祭および神輿の渡御が行われる。祭礼の実施状況は『丸岡町史』などにも詳細に記載されている。

※詳細は「歴史的風致2 丸岡城にみる歴史的風致」を参照

## ⑥横山神社

### ○概要

祭神は継体天皇。延喜式の官社であり、早くから横山神社の荘園をもって、坪江郷三十四カ村の総社となっていた。

この地は継体天皇の住居の地と伝えられている。神社の後方には、丸岡町坪江から金津町中川にかけて南北3kmにわたる横山丘陵が広がり、横山古墳群がある。横山古墳群の被埋葬者は、継体天皇と親密な関係を持つ大首長たちと考えられている。



横山神社



### ○横山神社に関連する建造物と活動

#### [建造物]

横山神社の拝殿・本殿は昭和 49 年（1974）に改築されており、当時の写真が残っている。境内には、明治 43 年の建立年が刻まれた灯籠などの石造物がある。

#### [活動]

横山神社の祭大礼は、4月 17、10月 5 日に行われる。祭礼の期間は、のぼりがたち、提灯が飾られ、夕刻には神主による神事が行われ、地区の住民が集まって来る。



拝殿幣殿完了報告祭（S49）



S49 の再建時の祭礼の様子

### ⑦石塚神社

#### ○概要

石塚の菅原神社は、明治 43 年（1910）に熊野神社を合併して、石塚神社と称し、大正 13 年（1914）に西出より東出の元熊野神社境内に石塚神社神石と共に移転し、大正 15 年（1916）に指定村社となった。

石塚神社境内には、古代より信仰を集めた岩座いわくらがある。岩座は神様の座席としてあがめられ、後には岩そのものが神様として祀られたと考えられている。



石塚神社

継体天皇が九頭竜川の治水工事を行ったとき、王自身がこの岩の上に立って指揮を執ったとも伝えられている。

## ○石塚神社に関する建造物と活動

### [建造物]

石塚神社岩座(坂井市登録文化財)は、高さ 0.5m、奥行き 1.2m、幅 1mの礫質砂岩である。古くから信仰の対象となっており、岩座の周囲を玉垣で囲み、灯籠、祠が整備されている。昭和 39 年(1964)に神道考古学の提唱者である大場磐夫氏が岩座と断定した。古神道における岩に対する信仰で、自然崇拜の対象となる岩を岩座と呼ぶ。

### [活動]

毎年 10 月に行われる石塚神社の秋の祭礼では、神事として治水の舞が行われる。岩座前まで獅子が舞ながらきて、その脇で稲穂を受け取り、神社正面に戻る。神社正面前で待つ区長に稲穂を渡すと、門舞の姿に変わり、区長はそのお祓いを受ける。神事の後には、神輿、鈴をならしてお祓いを行う門舞、白装束の天狗が連なって、地区内を回る。

「治水の舞」は、伝説をもとに平成 14 年(2002)に獅子舞保存会が結成されて、完成されたものだが、『春江町史』には、「例年大祭日には神饌を供して祀り永遠にその偉業と恩沢を敬仰し聖跡を保存している」と記載されており、それ以前から岩座を祀る活動は行われていたことがわかる。



石塚神社石座



治水の舞の様子

## ⑧久米田神社

### ○概要

祭神は大伴金村大連である。大伴金村大連は武烈天皇崩御後、自ら高向郷に赴き、継体天皇を擁立した豪族として知られている。神社は六呂瀬山古墳群を拝むように鎮座しており、関係があるものと推測される。

越前国で洪水があり、住民が非常に困ったとき、継体天皇は深く心配になり、早く災害を治めようと高向郷にとどまった。そのとき、神社を建立して自分を皇



久米田神社拝殿

位に就かせた大伴金持を祭神としたといわれている。

### ○久米田神社に関わる建造物と活動

#### [建造物]

現在の本殿・拝殿は、昭和 11 年（1946）の建設であり、建設当時の写真が残っている。



本殿・拝殿落成（S11）  
当時の写真

#### [活動]

春（4月3日）・秋（10月3日）に祭礼が行われている。境内には幟が建てられ、提灯なども飾られ、神事（お祓い）が行われ、下久米田地区の住民が参拝に訪れる。（『丸岡めぐり（S33）』にも祭礼が実施されてきた記載がある。）

### ⑨久米田八幡神社

#### ○概要

祭神は応神天皇、伊弉册尊。創建は不詳だが、平安時代後期頃 集落の守護神として祀られたという。

明治9年村社指定。大正4年社殿を新築し、同時に白山神社（祭神 伊弉册尊）を合祀した。六呂瀬山古墳群の麓に立地する



久米田八幡神社

#### ○久米田八幡神社に関わる建造物と活動

#### [建造物]

境内には、昭和 16 年（1941）の建立が刻印された灯籠が所在している。

#### [祭礼]

久米田八幡神社の例祭は3月18日（春祭）、9月25日（秋祭）に行われている。「越まほろば物語」では、祭礼の中で、古代の越の大王たちの御霊を鎮め、新しい大王が王位を継承する儀式を再現した大王祭、九頭竜川から六呂瀬古墳群までの「石運び」などが行われた。祭礼は、古墳群を背景に行われるもので、住民の古墳群に対する意識を窺うことができる。

### ⑩<sup>ろくろせやま</sup>六呂瀬山古墳群（国指定史跡）

標高約 200m の六呂瀬山山頂、丘陵の尾根に築かれた、古墳時代中期の前方後円墳 2 基、方墳 2 基からなる古墳群である。前方後円墳である一号墳は出土した埴輪などから 4 世紀後半～5 世紀初頭のもので考えられ、全長 143m である。また、三号墳は同じく出土した埴輪などから、5 世紀初頭のもので考えられ、全長約 85m ある。



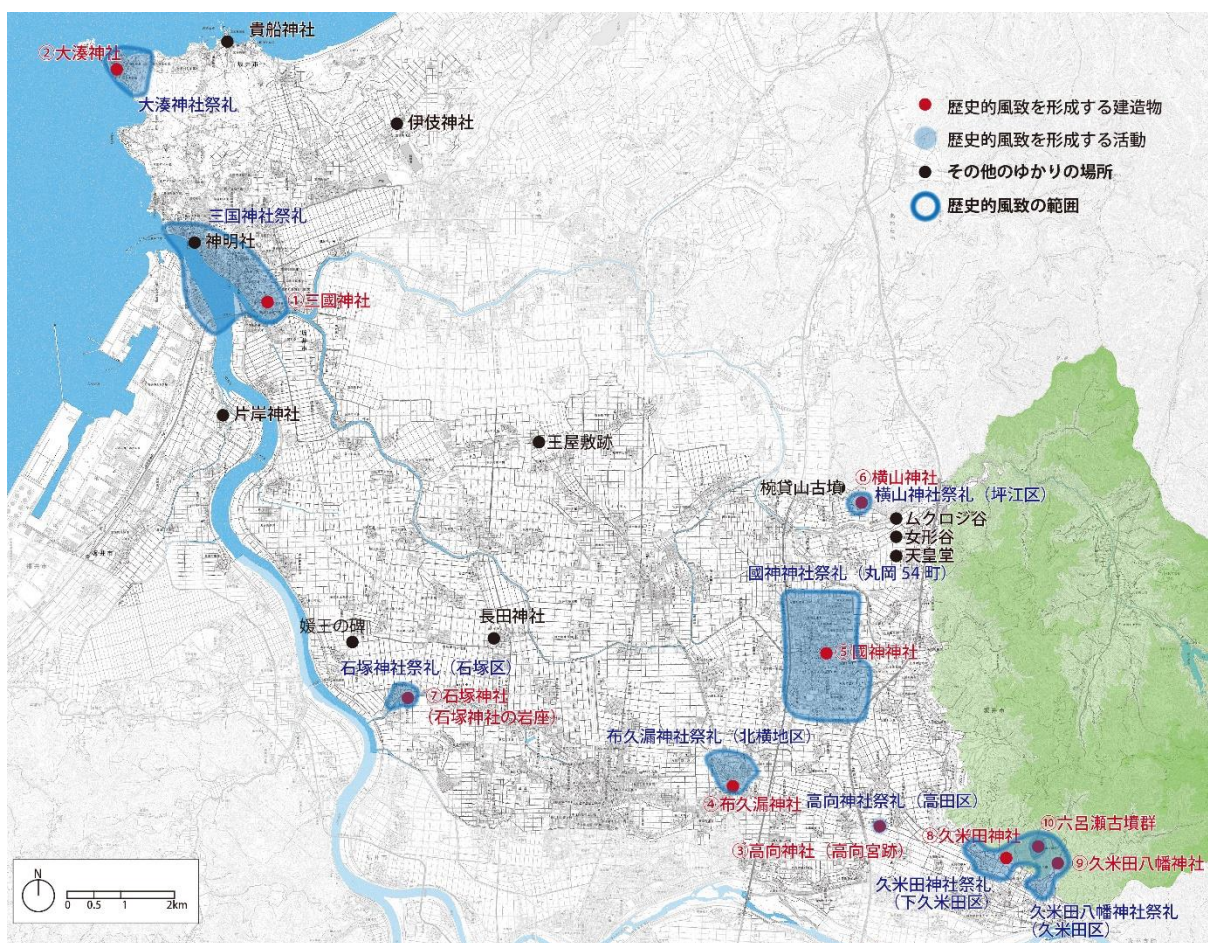
六呂瀬山古墳群

両古墳ともに葺石が葺かれた、2 段築成の古墳で、一号墳は北陸地方最大級の前方後円墳である。被葬者は 4 世紀末から 5 世紀前葉ごろに九頭竜川の流域を支配した広域首長の墓と考えられ、後の継体天皇とも深いかかわりが想定される。

六呂瀬古墳群の存在は、古くから地元住民が知るところであった。古墳群を含む丘陵地は、周辺住民の暮らしに身近な場所であり、山菜を採りに行ったり、子供の遊び場になったりしていた。特に、久米田神社、下久米田神社の祭礼の際には、神社の背景として、祭礼の風景の一部を形成している。

(3) まとめ

市内に分布する神社は、建物や石造物、社叢など、日常から住民にとって地区の歴史を改めて感じられる場所であり、春や秋になると祭礼が行われ一斉に地区の人々が集まる。それぞれの神社の祭礼は、地区住民によって執り行われるものであり、いずれも、地区の歴史として大切に継承されてきており、地区の個性を形付けるものである。神社の景観や神社で営まれる祭礼行事等を通して、継体天皇の伝承が、地区の人々の暮らしに身近に存在し、坂井市の郷土愛や地域を思う心を養う風致を形成している。



歴史的風致の範囲

コラム「継体天皇にゆかりのあるその他の場所」

○てんのう堂（坂井市登録文化財）

この場所は、継体天皇が、治水狩猟の際に休憩した場所で、都からの特使（大伴おおとものかなむら金村）と面会したところとも伝えられている。

白山神社の社地であり、祠および腰掛たといわれる腰掛石がある。



天皇堂

○おさだ長田神社

祭神は継体天皇である。継体天皇は榊田里に5年間住んでいたと伝えられている。逗留中、当所に応神天皇を八幡宮に祀り尊崇した。その頃、当所には5人の長があり、その内の道麻呂という者の娘、琵琶女此との間に子供ができ、千鶴媛と名付けられた。そのとき、産湯として使ったとされているのが長田神社境内にある長田池である。



長田神社

○いき伊伎神社

祭神は継体天皇ほかである。宝亀6年（775）の創祀と伝えられる古社。社伝によると、池上の地は、古くは「伊伎加美」と呼ばれ、日本武尊東征の折、北陸路より帰陣した一隊を迎えた村人達が日本武尊を勧請して伊伎神社を創建したという。



伊伎神社

男大迹王は幼年期、当地に王居を構え、伊伎神社を尊崇したことから、欽明天皇三十年に、継体天皇・安閑天皇を合祀。王居跡にある皇子池に因んで、村名を池上としてという。

### ○神明社

祭神は天照皇大御神、継体天皇である。継体天皇は九頭竜川などの河川開拓のおり牧岡を行在所とした。王が越前を離れた後、国民がその徳をしのび、旧行在所に遷座して牧岡神社を称号したといわれている。19世紀末に神明社に改称した。



### ○片岸神社

祭神は継体天皇である。干拓事業を行った継体天皇の功績に感謝し、阿古江新保浦字片岸岡燎火山に、天平勝宝年間（749～757）大伽藍片岸神社を建立して継体天皇を祭神として祀った。

昔は、当地にあった神明神社の境内社であったが、明治18年（1885）、本殿の神明神社を境内社とし、境内社の片岸神社を本社とした。



片岸神社の所在する山岸には継体天皇が三里浜に立ち寄った際、ぞうりをわらじに履き替えた場所で、村人がぞうりを大切に保存してきたとの昔話が残る。

片岸神社が存在したとされる新保村字片岸岡燎火山地籍から発掘された遺物品が境内に存置されている。

### ○継体天皇の腰かけ石（貴船神社）

継体天皇が梶浦へ巡幸したとき、休憩し、座ったと伝えられる石である。明治初年に、貴船神社に移し、現在は境内の中に安置してある。現在の台座には昭和19年（1944）移転と刻まれている。石台の横には石碑が建立されている。



継体天皇の腰かけ石

### ○媛王の碑

振媛が晩年を過ごした媛屋敷跡があったと伝えられ、地区名の「媛王」もそれに由来する。「振媛命在座終焉之地童子之城媛屋敷跡之碑」があり、振媛の屋敷にあったという大石（怪我石）と穴の開いた石（馬つなぎ石）が、碑を建てて守り伝えられている。



石碑

### ○女形谷（字名）

御名谷（向王子谷）は継体天皇が住んでいたと伝えられ、即位により「御名が谷」と呼ばれるようになったものが変化したとされる。

### ○ムクロジ谷

向王子谷は高向王子、すなわち継体天皇の御館のあったところといわれている。王はムクロ樹からとれる繊維をもって、織物をすすめたと伝えられている。

### ○王屋敷跡

継体天皇の宮殿があったとされている。継体天皇即位1,500年を機に、屋敷跡にある稲荷神社の社の改築を決意し、有志5人が浄財を出し合い行われた。

### ○丸岡古墳群

上久米田地区から野中山王地区にかけての標高50～200mの丘陵斜面には総数130基に及ぶ前方後円墳・円墳・方墳が分布しており、「丸岡古墳群」と呼ばれている。六呂瀬山古墳群は丸岡古墳群の一支群である。

椀貸山古墳は、國神神社にも祀られている、継体天皇と倭媛との第二皇子である椀子皇子の古墳と伝えられている。



### コラム：六呂瀬山古墳群に関する住民の活動

六呂瀬山古墳群の建設された丘陵は、中世には山城が築かれ、江戸時代の『越前国名蹟考』（文化12年（1815）に成立）には「陵山城跡」「一夜城」とも記録されており、「木曾義仲の旅陣所」ともいわれている。

明治時代になると、明治43年（1910）、大谷尋常小学校（現・鳴鹿<sup>なるか</sup>小学校）の井関校長により、六呂瀬山上で円墳が発見された。

昭和53（1978）年には六呂瀬山古墳群の発掘調査が行われ、調査の結果、国道365号線の道路計画が変更され、六呂瀬山古墳群の保護が図られた。これが住民活動の契機となった。365号が開通後、平成元年（1989）より10年間、地域おこしとして立ち上げた「越まほろば物語」は、多様なイベント等を通して、地域内外に六呂瀬山古墳群をPRした。



鳴鹿小学校の学習の様子

10年間の活動の経緯は、『越まほろば物語（2000）』に詳細にまとめられている。

平成15年（2003）には、「六呂瀬山古墳群&鳴鹿大堰を愛する会」が発足し、継体天皇の伝承を中心として、六呂瀬山古墳群および鳴鹿大堰の歴史を一体的に守る取組が行われている。現在は、鳴鹿まちづくり推進協議会のまほろば歴史部会が、清掃などの古墳環境整備、まほろば学習として鳴鹿小学校の六呂瀬山古墳群や鳴鹿大堰の見学会、勉強会などを行っている。まほろば学習では、鳴鹿小学校の6年生が参加し、現地に赴き、地域の方の案内によりその歴史を学ぶとともに、発掘場所に入るなど見学を行っている。

## 2. 丸岡城にみる歴史的風致

### (1) はじめに

一向一揆の拠点であった豊原寺を焼き払った信長により、越前国の大部分を与えられた柴田勝家の甥・勝豊は、豊原に駐留したのち、西方の小丘・丸岡に居城を築いた。それに伴って寺社や職人らも丸岡に移り、丸岡城下町の礎を築いた。

丸岡城は、寛永元年（1624）の丸岡藩成立以降は、丸岡藩主の居城となった。国内で唯一現存する石瓦葺の天守であり、市民からは「お天守」と呼ばれ親しまれている。

独立丘陵を利用して形成された丸岡城郭とそれを取りまく城下町は、田島川を外堀として利用して整備された。城下の寺院群のなかには、藩成立時の藩主であった本多氏ゆかりの本光院や、本多氏の改易後日向国延岡から入封した有馬氏が延岡から移した高岳寺、台雲寺、白道寺といった歴代丸岡藩主ゆかりの寺院がある。

城下町においては、堀などの水路の一部や地割、寺院群などが城下町の歴史を今に伝えている。丸岡城下町に起源をもつ芸能として、日向神楽が現在まで継承され、長畝八幡神社の秋の祭礼で演じられている。

また、城下町周辺にも丸岡藩ゆかりの寺社等が点在しており、丸岡城天守は旧丸岡町のシンボルとなっており、丸岡城の歴史を継承することを目的に実施されている丸岡まつりは、旧丸岡町の範囲で行われるなど、城下町だけでなく広い範囲で、丸岡城に関する歴史が、市民の暮らしの中で継承されている。

### (2) 歴史的風致を形成する建造物

#### [丸岡城に関する建造物]

#### ①丸岡城天守（重要文化財）

丸岡城は別名霞ヶ城とも呼ばれ、平野の独立丘陵を利用してつくられた平山城である。戦国時代の天正4年(1576年)一向一揆の備えとして、織田信長の命を受けて柴田勝家の甥・勝豊が築いた。標高27mの独立丘陵を本丸として天守を築き、その周囲に二の丸と内堀、その外側に三の丸と外堀を巡らせていた。



丸岡城天守

天守は本丸南西部の最高所に位置し、高さ約6.2mの野面積みの石垣の上に、二重三階、高さ約12mの独立式望楼型天守である。1階と

2・3階の間に通し柱は無く、1階が2・3階を支える構造となっている。また、屋根は石の瓦で葺かれている。

### ②丸岡城の城門遺構

丸岡城郭にあった3か所の櫓門のうち一つである不明門が、明治初期に移築されたものと伝えられている。

現在平屋建だが、福井地震で倒壊するまでは二階建だった。もともとは切妻造二階建の赤棧瓦葺で、1階四周には下屋根がついていたと推測される。妻飾り懸魚に有馬家家紋の五瓜剣唐花があり、棟の礎は丸岡城天守のものとよく似ており、丸岡城郭の門と考えられる。

福井地震以前の二階建だった門の写真が残っている。



丸岡城の城門遺構



昭和15~17年に撮影された門  
(坂井市所蔵)

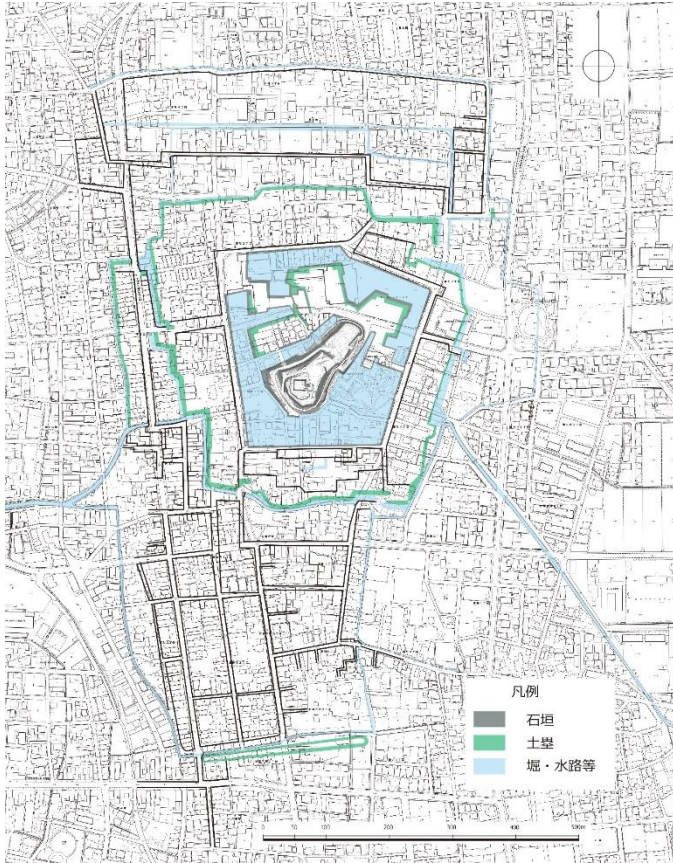
### ③堀割（田島川）

丸岡城の外堀が現在も水路として残っている。田島川は南東側から城下町に流れ込み、城郭の南側、三ノ丸と城下町の間を流れている。現在の城のまちコミュニティセンター前や料亭本多の東側は直角に曲げられており、その形状に外堀の名残を見ることができる。また、料亭本多東側の屈曲した場所では、崩れた石垣の内側にさらに古い石垣が確認でき、水路がその形状を維持しながら存続していることがわかる。

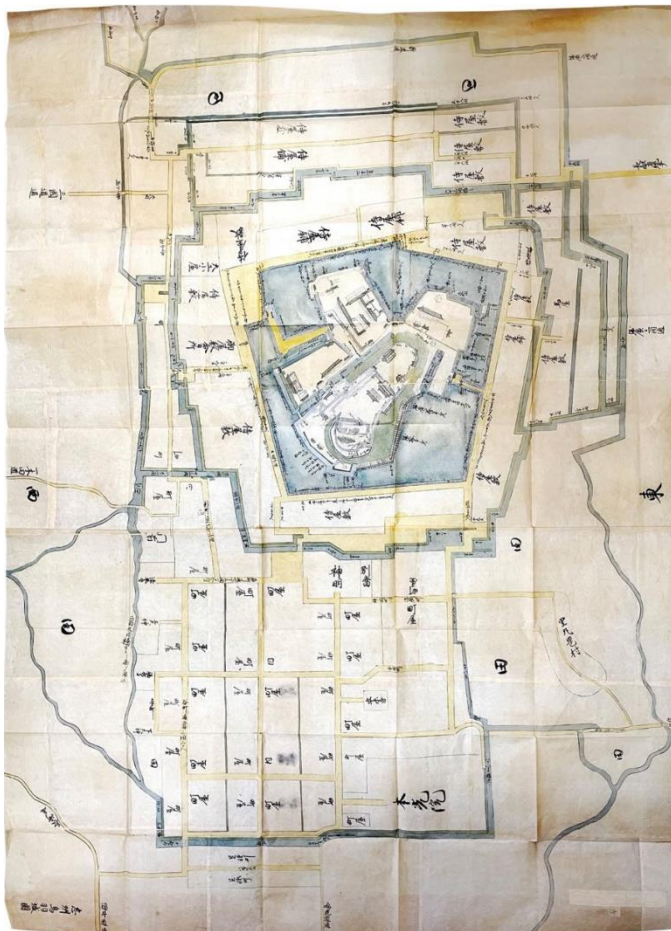


水路として残る外堀の跡

『坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書 丸岡城』（坂井市教育委員会、2021）には、丸岡城下町を現在の地図に重ね合わせて復元図が作成されており、堀などの城下町の骨格の一部が、現在まで継承されていることがわかる。



丸岡城下町と現在の市街地を重ね合わせた復元図（『坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書丸岡城』（坂井市教育委員会、2021）を一部加工）



丸岡藩 越前丸岡城図「志州鳥羽城絵図と題する丸岡城下町絵図」坂井市で購入済  
赤文字「大工小屋」「御屋敷會所」「馬屋」加筆より（『丸岡城周辺整備計画』より）

[藩主ゆかりの寺社に関する建造物]

④本光院

本多家の菩提寺である。本多家は成重の代、慶長18年（1613）に丸岡城主になり、寛永元年（1624）に4万6千石で初代丸岡藩主となった。丸岡城初代藩主の本多成重の死後に、現在の石城戸町白道寺に本多家の菩提寺として創建された。寺号は藩祖で父親でもある本多重次の戒名「本誓院殿月窓浄運大居士」と成重の戒名「本光院殿鉄哉土庵大居士」に因み本光院月窓寺と名付けられている。有馬家が丸岡藩の藩主になると、有馬家の菩提寺である白道寺が境内に移されたため、それに伴い現在地に移され境内も縮小された。

境内には、本多重次、成重、重能、重昭の墓があり、市指定の文化財（遺跡）となっている。

なお、本多家系図は1章に掲載されている。



本光院本堂



本多家歴代墓所

⑤<sup>びやくどうじ</sup>白道寺

慶長18年（1613）、有馬直純が島原藩主のときの島原に有馬家菩提寺として建立した。昭和23年（1948）の大地震で全壊し、本堂等は再建されている。

白道寺は、丸岡藩に関する歴史的な資料を所有している。また、庭園は、丸岡城を築いたときに、柴田勝豊が御用商人の庭師に作らさせたものと伝えられる。

境内には、有馬直純墓所および同室の日向御前の墓所がある。有馬直純の墓石には、寛政2年4月の年銘が刻まれている。有馬直純は、肥前日野江城主の有馬晴信の嫡男で、日向御前（国姫）は徳川家康の養女である。有馬清純が丸岡藩主となった際に、藩祖の有馬直純の墓所は白道寺に移転された。

なお、有銘家系図は1章に掲載されている。



白道寺本堂



(左上) 白道寺庭園  
(右上) 有馬直純墓所  
(左下) 白道寺所蔵歴史資料

⑥ <sup>だいうんじ</sup> 台雲寺

有馬家菩提寺として、島原に開創されたと伝えられ、藩主と共に丸岡へ移ってきた。曹洞宗の寺院である。

境内には市指定文化財（史跡）である蓑笠庵梨一墓が所在している。蓑笠庵梨一は、江戸で俳諧を学び、丸岡藩は石城戸に住まわせ、藩士に講義を行わせた。私塾蓑笠庵を開き多くの門人に学問を教え、丸岡俳諧の基礎を作った。



台雲寺

⑦ <sup>こうがくじ</sup> 高岳寺

高岳寺は、有馬家第15代直純公が、徳川家康の曾孫である国姫を正室とし、また島原から日向国・延岡への国替えなどの家康の恩義に報いるため、東照大権現を祀り、かつ有馬家代々の菩提寺とするため、直純公の遺命により第16代康純公が明暦元年に日向国延岡に創建した天台宗の寺院である。元禄八年に有馬家と共に丸岡に移り、歴代の城主菩提寺となる。



高岳寺本堂

境内奥には、有馬家歴代墓所（市指定文化財）がある。墓所には、延岡藩 15 代直なお純ずみ、16 代康純やすずみの墓とともに、丸岡藩初代清純きよずみ、2 代一準かずのり、3 代孝純たかずみ、4 代允純まさずみ、5 代誉純しげずみ、6 代徳純のりずみ、7 代温純はるずみの有馬家 9 代の墓がある。

また、宝暦 2 年（1705）に竣工。地蔵堂があり、2メートルもある六地蔵が立っている。宝永 6 年 4 月供養のためにたてたもので、石工仁右エ門の名も刻んである。

### ⑧ 受法寺じゅほうじ

明応 5 年（1496）現在地に移転し、後に丸岡城主本多家の祈願寺となった。久保田酒造と敷地が接する。開祖は加賀江沼郡勅使村願成寺（石川県加賀市）住職の弟の顕崇で、はじめ加越国境の市野々村（金津町）にあった。第 5 世受法は、丸岡藩主本多重昭の深い帰依を受けた。重昭の懇請により、受法寺の寺号を受けた。



受法寺本堂

本堂と鐘楼門は、享和 3 年（1803）に丸岡藩から造営木材伐採許可を藩から得て建てられた。福井震災では、倒壊を免れ、昭和 38 年（1963）の修理では、部分的改修により価値を維持している。



受法寺鐘楼門  
(益田委員撮影)

庭園は後ろの山を借景に取り入れた池泉庭園である。境内にある「俱会一処」と刻まれた石碑は、昭和 12 年（1937）建立と刻まれている。

### ⑨ 直乗院じきじょういん

開基は道範大徳であり、建長初年（1250 年頃）にこの地に巡錫のとき、一字を建立し、本尊胎藏界五智如来を祀り、仏眼山直乗院と号した。丸岡城の鬼門の方角に位置していたため、本多家が丸岡城主の頃祈願所とし、寺紋に「本多立ち葵」を使用している。



直乗院本堂

本多重昭公時代、境内地 4 反 28 歩並びに境外田畑を拝領し、第二十世日元上人が中興したとされている。また、直乗院境内には、本

多成重公時代に新江用水を開いた渡辺泉龍を讃え、境内に記念碑が建立されている（市指定の文化財〔遺跡〕）。

本堂等は昭和23年（1948）の福井大震災で倒壊したが、再建されている。

### 〔城下町の祭礼に関する建造物〕

#### ⑩<sup>のうね はちまんじんじゃ</sup>長畝八幡神社

寛文年中（1661～1673）、丸岡藩主本多重昭は長畝八幡に社地9段余歩を寄進して、鬼門除けの守護神とした。元禄10年（1694）に藩主有馬清純は社領80石を寄進し如意山中台寺を八幡宮の別当とした。中台寺は、真言宗で寛海の開山である。維新の際、中台寺から出火して、社殿を焼失したので、そり橋を明治3年（1870）に國神神社に移した。10年に至って、現在の境内に再度移築した。

本殿は福井地震で倒壊したが、昭和34年（1959）に再建されており、上棟式の写真が残っている。本殿は木造瓦葺流れ造り、拝殿は木造瓦葺入母屋造である。また、境内にある本多重昭寄贈と伝えられ、灯籠は寛文5年（1665）建立の刻銘がある。



八幡神社・拝殿



再建上棟式の様子（昭和34年）  
（日向神楽伝承館展示資料より）



⑪<sup>くにがみじんじゃ</sup>國神神社

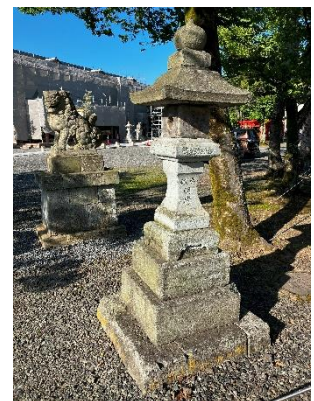
繼体天皇が、まだ皇子で、この地方に在住していたとき、倭媛<sup>やまとひめ</sup>との間の第二皇子が、地名にちなんで椀子皇子といった。その産湯を胎衣と共に「磨留故乎<sup>まるこのお</sup>加<sup>か</sup>」（現在の丸岡城のある場所）に埋めて、神明宮としたのが創建と伝えられる。磨留故乎加は丸岡の地名の由来となっているという説もある。

その後、天正4年（1576）、柴田勝豊が丸岡城を築くに当たり、神社を現在地に遷座し社領等の寄進があり、その後代々の城主の篤い崇敬の下、社殿の造営、修繕が行われた。丸岡藩主の本多家、有馬家からの奉納品が社宝として保存されている。

境内には、丸岡藩最後の藩主である有馬道純が明治4年（1871）に寄進した灯籠があり、灯籠には明治4年（1871）の刻銘がある。



國神神社



有馬道純寄進の灯籠

[統治の中心に関する建造物]

⑫丸岡城天守（国の重要文化財）

再掲

⑬豊原寺跡（坂井市指定文化財（遺跡））

豊原寺は、大宝2(702)年に泰澄大師が十一面観音を刻んで本尊とし、豊原八社権現をも祀る寺院として建立したといわれている。戦国時代までには有力寺院として繁栄し、越前が一向一揆勢に支配されると、豊原寺も一揆勢に拠点化された。このため、織田信長が越前一向一揆を制圧した際には、豊原寺も焼き払われ、この地を与えられた柴田勝豊が城を築いている。



地蔵堂

明治2年（1869）の華蔵院の焼失や神仏分離令の影響もあり、白山神社を残して豊原寺は廃寺となった。現在は、華蔵院の跡や講堂跡（伝）および、白山神社（権現山）が残っている。

⑭称念寺（長崎城跡）

称念寺は、正応3年（1290）に伽藍が建立され、室町時代には時宗布教の中心となり長崎道場といわれた。また、太平記に「長崎城」として記載があり、南北朝時代には南朝方の武将新田義貞が拠点の一つとしていたと記されている。称念寺境内には、新田義貞公墓所（県指定の記念物）がある。



新田義貞公墓所

朝倉氏が越前を治めていた当時は、舟寄館とともに坂井郡東部一帯の統治の拠点となり、争いの舞台となった。

長崎遺跡では、平成28年（2016）度と令和2年（2020）度に発掘調査が行われ、中世の遺構が検出されている。

称念寺の所有する中世文書を含む計62点の所蔵文書は坂井市の指定文化財となっている。

[丸岡藩に関連する産業等の建造物]

⑮久保田酒造

宝暦3年（1753）創業の造り酒屋。離れの建物は、福井地震後大聖寺から移築された。邸内に清流と美しい汀を作庭し、離れはこれを眺めるための瀟洒な二階縁をそなえる。昭和初期の建物（『福井県の近代和風建築』（2012年））で、用水が屋敷を囲む風致がよい。



久保田酒造・庭園  
（越澤会長撮影）

⑯新江用水・渡辺泉龍碑

新江用水は、寛永2年（1625）に加賀の浪士渡辺泉龍と丸岡藩の村人により4年の歳月をかけて開かれた。丸岡藩主の祈願所であった女形谷の直乗院には、渡辺泉龍を顕彰する石碑（坂井市指定文化財）が建立されている。

※詳細は「歴史的風致4 九頭竜川・竹田川の恵みと備えの営みにみる歴史的風致を参照

### (3) 歴史的風致を形成する活動

#### ①丸岡古城まつり

住民の手で丸岡城を後世に伝承することを目的に、旧丸岡町時代から続く、旧丸岡町全域の住民が参加するイベント。令和4年（2022）には第53回が行われた。

武者行列、からくり人形山車、総踊りなどが行われる。大名行列は、歴代城主に扮して甲冑等を着用し、地区内を練り歩く。からくり人形山車のルートは旧丸岡町全域の7地区で順番に持ち回りである。

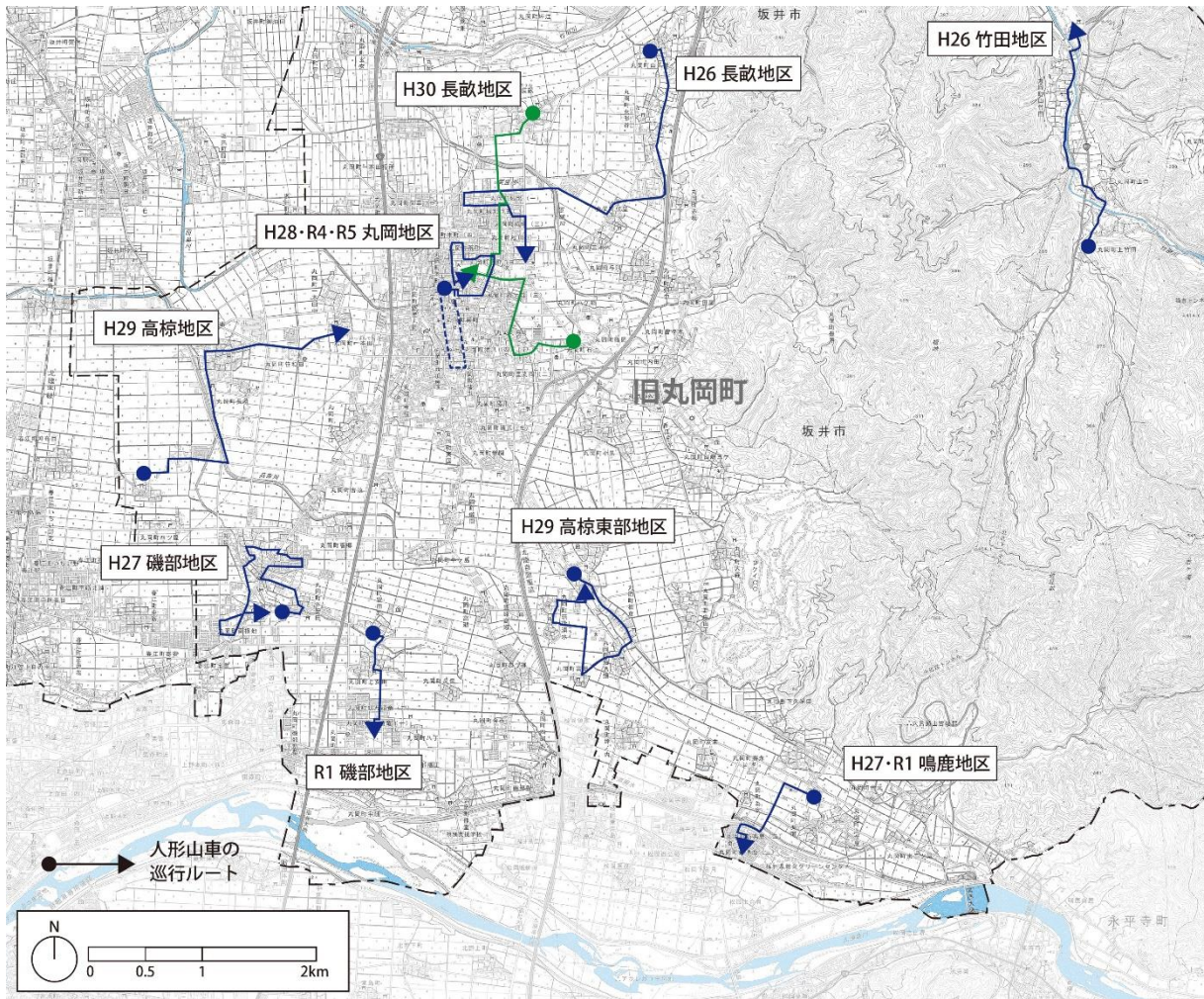
高さ4mを超える人形を載せた山車には、子供たちが乗り太鼓を交代で叩く。通りがかる家にはお菓子を配り、地区の神社や寺院等の要所では、お囃子とともに演舞を行う。令和5年は、本多成重と本田作左衛門の人形山車が、丸岡地区の南北2か所のルートを練り歩いた。白道寺や國神神社などの丸岡藩ゆかりの寺院、神社の前を通り、丸岡城のお天守前公園で合流した。



大名行列（昭和31年撮影）

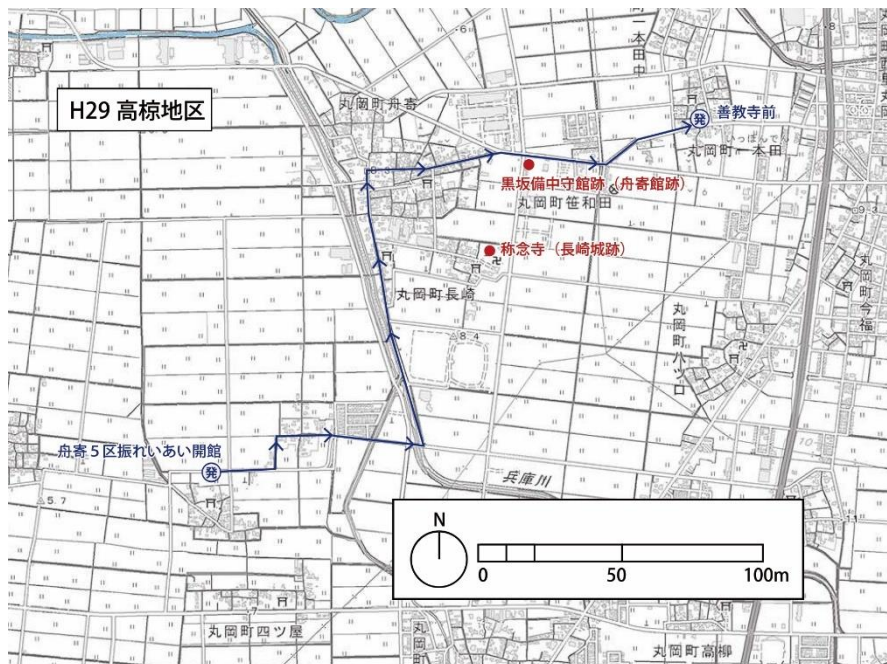
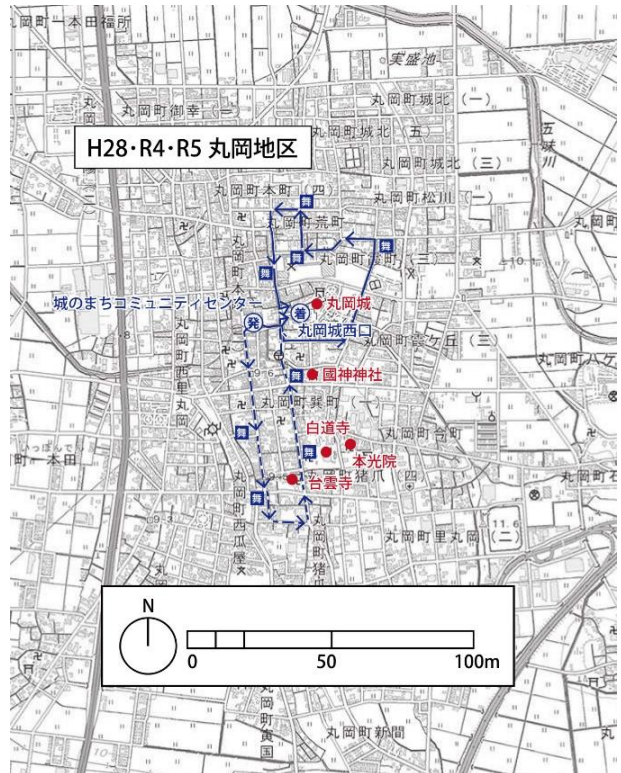
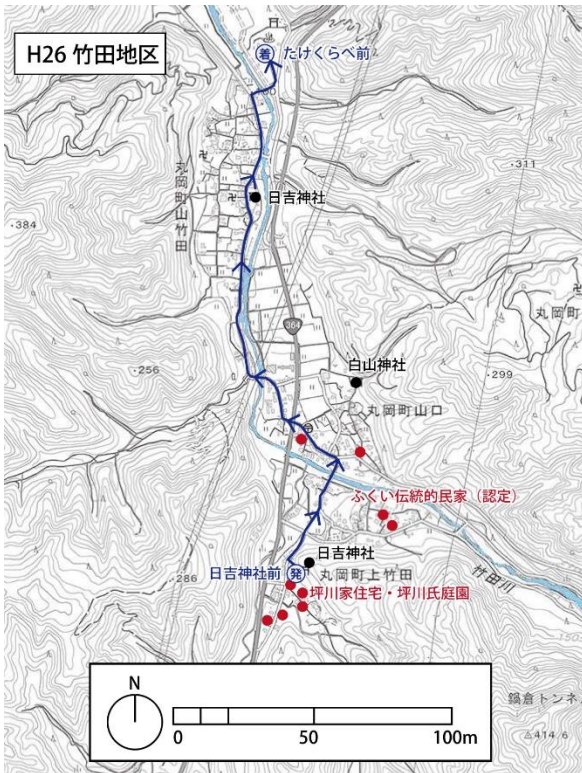


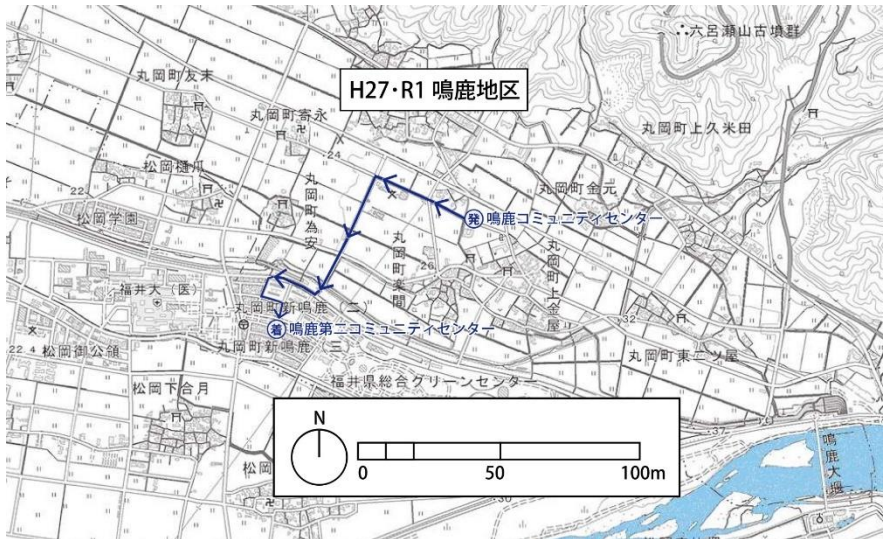
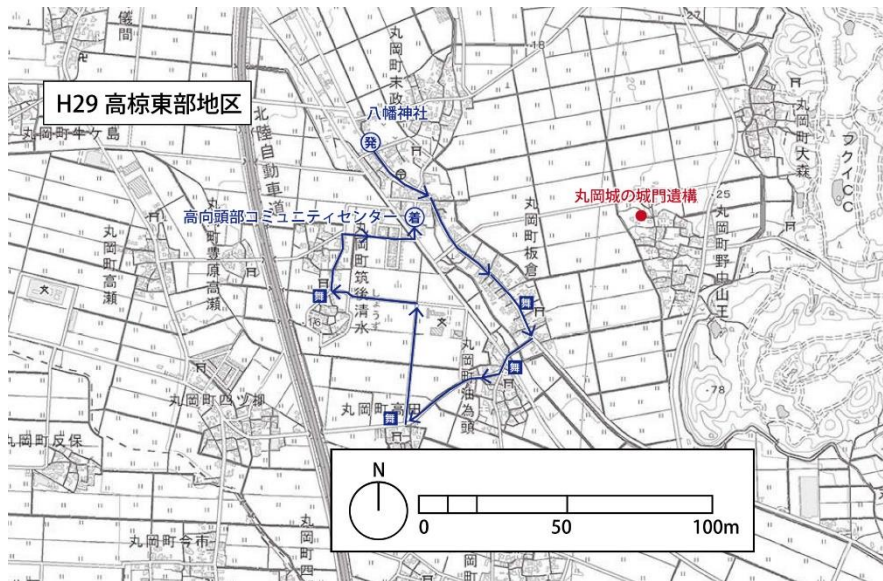
からくり人形山車の様子

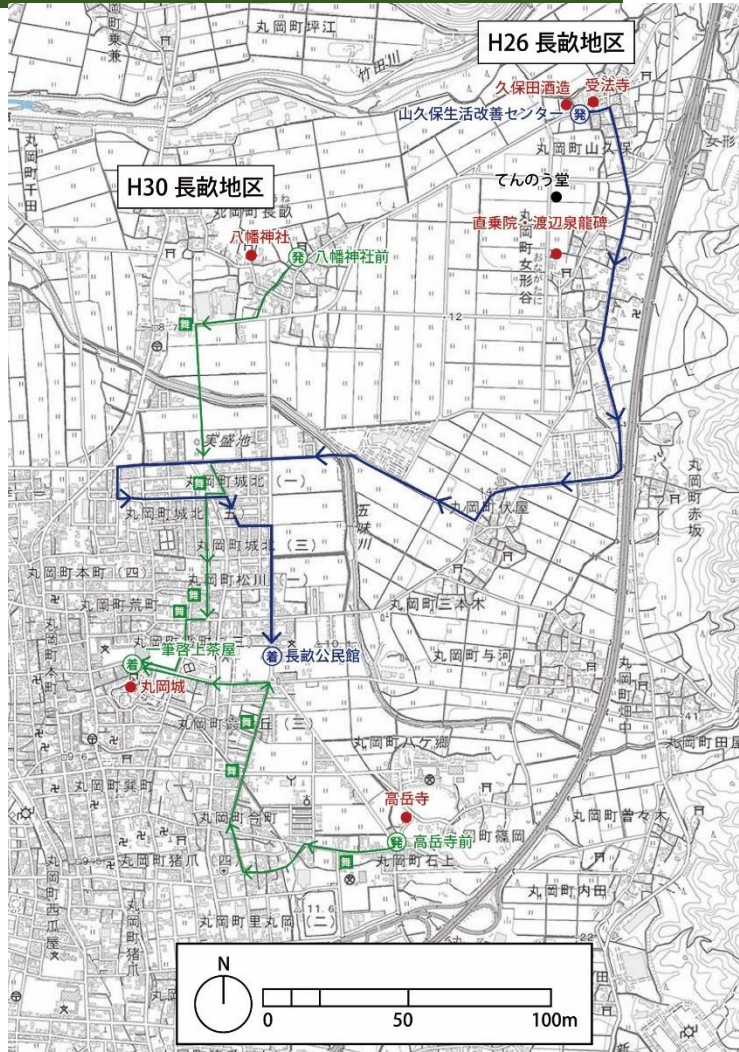


平成 26 年（2014）以降の毎年のからくり人形山車の巡行ルート

地区ごとのからくり人形山車ルート（詳細）







②日向神楽（県指定の無形民俗文化財）

毎年9月第三土・日曜日に長畝八幡神社の秋季例大祭で演じられる、福井県内では珍しい岩戸神楽である。

元禄8(1695)年に有馬清純が日向国延岡城主から越後糸魚川を経て丸岡藩主になった際、神楽衆を同伴したことが始まりとされる。丸岡藩時代には長畝八幡神社のほか城下6か所の神社で奉納されていた。日向神楽の舞人は藩によって召し抱えられており、明治に入り藩が解体されると、神楽廃絶の危機となったが、明治15年(1882)に長畝村有志「敬神社」という神楽講を組織して日向神楽を継承した。



日向神楽の様子

現在は長畝日向神楽保存会として活動を行っている。「産米」「剣」「策」「置位」「柴引」「手力雄」など16番が伝承されている。

夜神楽 第1日目 午後7時より約2時間

夜の神楽は、天照御大神が、岩戸に閉じこもってから外に連れ出すまで…

- 18:55～ 祝詞 神楽の演目に先立ち、祝詞を上げる。祝詞は龍笛・太鼓・鉦のみで、八百万の神々を長畝八幡神社に招く。
- 18:58～ 一同参拝 本日神楽を奉納する、日向神楽保存会員が一同参拝し心を新たに正する。

19:00～ 演目：約20分	さんまい 散米	宵宮の神楽において、最初に演ずる舞で舞台を清める意味を持っている。
約25分	つるぎ 剣	初段は櫛、中段は扇子、後段は剣を使って舞う、悪魔祓いの舞い。
約10分	とい 間	天児屋根命の舞、岩戸七番の一つ。天の岩屋戸の前で、祝詞を奏して天照御大神の出現を祈請した下りの唱教をながながと語る。
約15分	しばひき 柴引	天太玉命の舞、岩戸七番の一つ。香具山で根から掘り起こした真櫛を、天の岩戸の前に植え、そこに鏡などを掛ける舞い。
約5分	しよだいた ちから 初代手力雄	俗に前の手力または初代手力と云う。後の二代手力と合わせて岩戸七番に数える。岩戸の前でにぎやかに騒ぐ。俗に前の手力と云う。
約15分	ととり 戸取	戸隠明神の舞、岩戸七番の一つ。少し開いた岩戸の中をうかがい、策で岩戸をこじ開ける舞い。
約5分	にだいた ちから 二代手力雄	手力雄命の舞い。天照御大神を天の岩戸から連れ出す舞い。俗に後の手力云う。前の手力と合わせて手力と云う。岩戸七番の一つ。



約 15 分	しんのまい 眞ノ舞	天照御大神の舞い。天照御大神が天の岩戸から出て初めて舞う舞い。岩戸七番の一つ。
約 10 分	しし 獅子	榊は後見人が持ち、獅子は大きな振出舞い、やがて榊の四垂れを口に銜えて取りながら舞う。余興の舞い。

昼神楽 第2日目 午後2時より

昼の神楽は、天照御大神と共に、光が戻った喜びを表している…

13:55～	祝詞	神楽の演目に先立ち、祝詞を上げる。祝詞は龍笛・太鼓・鉦のみで、八百万の神々を長畝八幡神社に招く
13:58～	一同参拝	本日神楽を奉納する、日向神楽保存会員が一同参拝し心を新たに正する。

14:00～ 演目：約 20 分	おきい 置位	二日目の最初に演じる舞で、御幣を持って舞うお祓いの舞い。
約 25 分	むち 策	俗に策神髓といい、岩戸七番の一つ。戸隠明神が岩戸を押し開いた策を持って舞う。
約 30 分	ひのまい 日ノ舞	天照御大神と豊受大神の舞い。初段は白御幣・青御幣。後段は月と日を持って舞う。
約 15 分	きじん 鬼神	猿田彦命の舞い。世の中が明るくなったことを祝う喜びの舞い。
約 35 分	つなきり 綱切	二日目に舞う舞で、昼の魔払いとも云う。太刀を持って舞うなど三種神器の縁起。
約 35 分	おろち 大蛇	出雲国の素戔鳴尊が、八股の大蛇を退治して、稲田姫を助ける舞い。
約 15 分	しめ 注連	注連神楽、略して単に注連と云う。大八州、平らけく、安らけくを祈願する舞い。岩戸七番の一つ。

約 5 分	長畝八幡神社 の御幣	日向神楽と共に、長畝八幡神社拜殿に奉納され、神楽が終わると、祖先の慰霊・世の中の平穏・五穀豊穡を願って参会者に (50 本) 配られる。
-------	---------------	--

### ③ 國神神社祭礼

秋季祭礼は、10月15～17日の3日間行われる。

15日は、氏子代表、来賓含めて約50人が神社に集まって祭典（神事）を執り行う。その後、丸岡五十四町内の各家々を廻ってお祓いをする宅神祭を行う。お祓いをしてもらう家は家の玄関等に祭礼札を貼っておく。

16日は宅神祭と併せて神輿の渡御が行われ、神輿をあげてもらう家も祭礼札を貼っておく。17日までの3日間は神社周辺に露店が並ぶ。なお、17日は後日祭である。『丸岡町史』にも当時の実施状況について記述されている。



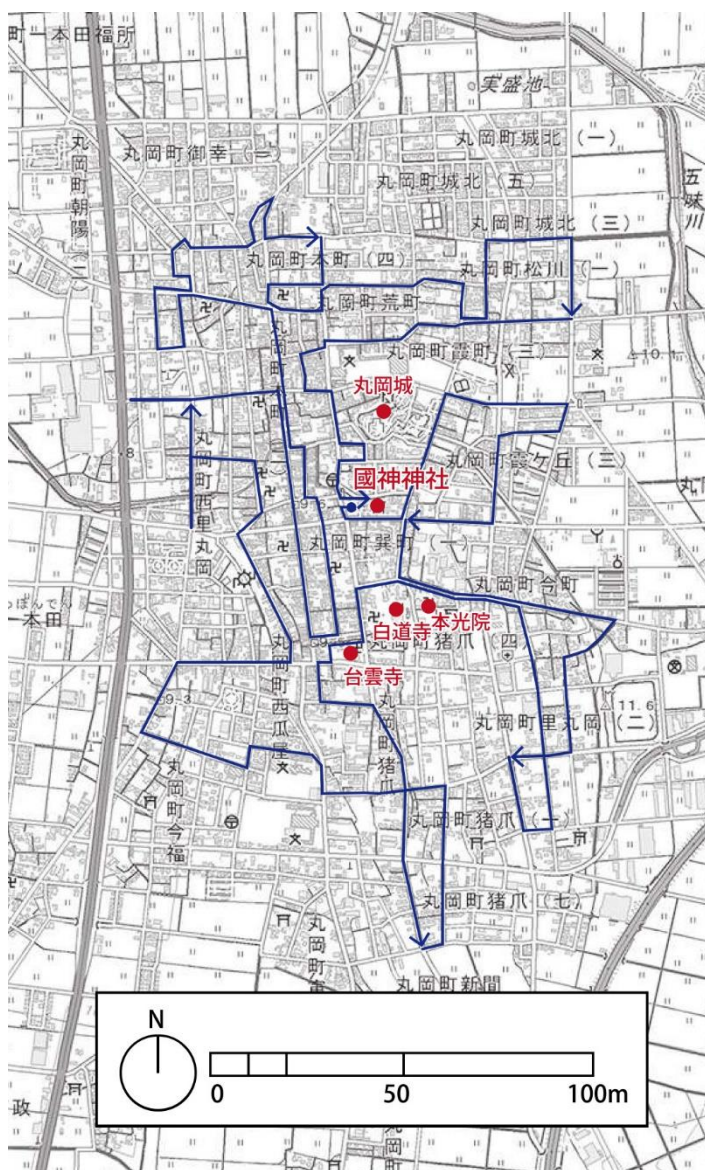
神輿とともに町内を練り歩く様子



國神神社前を通過する神輿の様子



玄関前で神輿をあげる様子



神輿の巡行ルート（令和4年）

#### ④称念寺奉賛会と新田公法要

明治維新の際、版籍奉還にあつてすべての財産を失い、住職もいなくなった称念寺は、新田義貞の墓だけとなった。再建を依頼され、赴任してきた高尾察玄氏の呼びかけにより、大正3年（1914）に、新田公菩薩所再興会が結成され、称念寺の再建が行われた。

第二次世界大戦と福井地震を経て伽藍が荒廃したが、再び新田公墓所奉賛会を結成して復興に着手した。再建工事が完成した昭和52年（1977）には、新田義貞公六百四十回法要を行った。その後、地域の有志により、称念寺奉賛会に再編し、称念寺を支え、昭和62年（1987）には650年忌法要を、地域挙げての法要として実施した。以後、毎年の新田公法要と10年ごとの大法要を実施している。檀家のいない称念寺にあつて、称念寺奉賛会は、現在も地区の住民から組織されており、境内の清掃なども行っている。

江戸時代に行われた新田公法要に関しては、称念寺文書にも記録が残っている。

国立公文書館にも江戸幕府の寺社奉行の文書が存在している（下記参照）。



六百四十回法要の様子  
（『称念寺再建史』より）

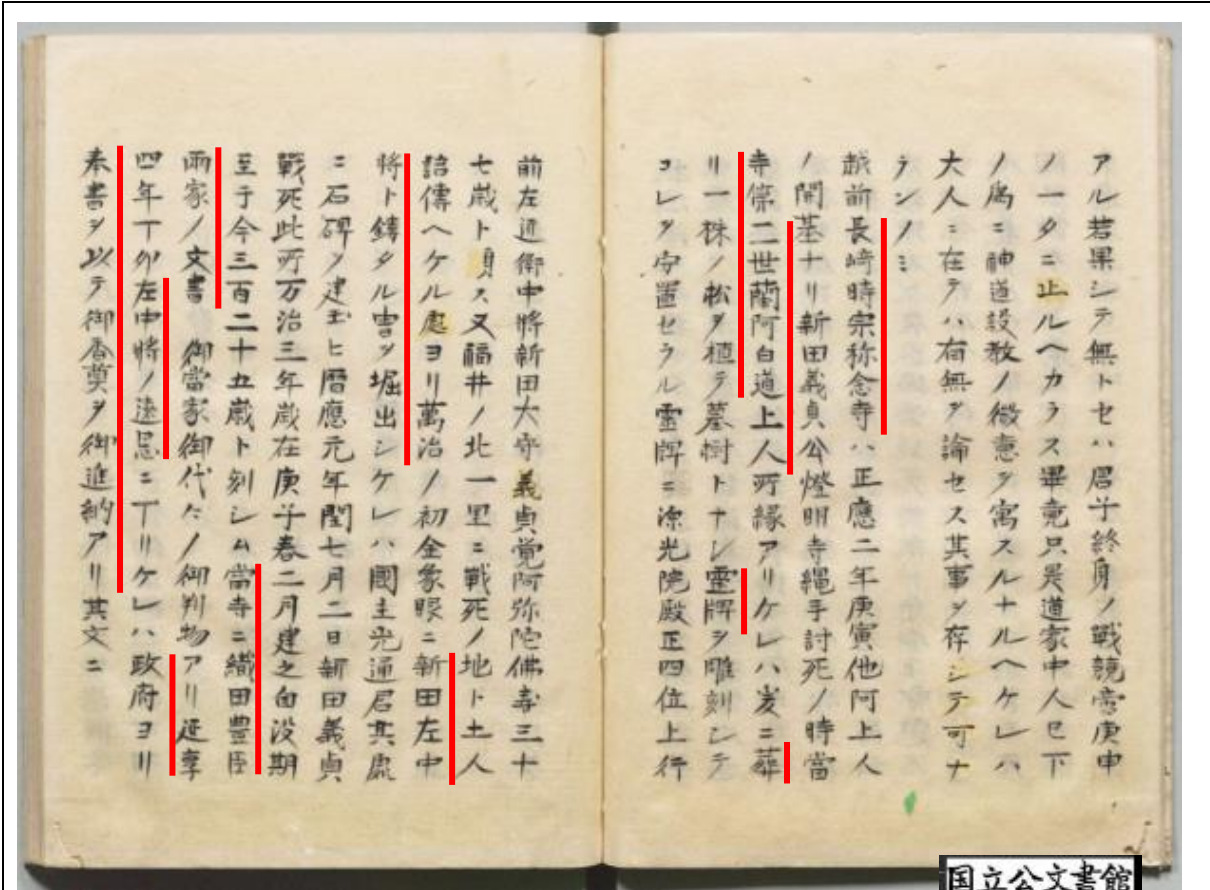


新田義貞公 450 年忌実施の指示  
（称念寺資料、越澤会長撮影）

国立公文書館には、江戸幕府が称念寺に対して新田義貞法要を指示し、資金援助したことを記載した公文書が保存されている（越澤会長が発見）。

#### ①江戸幕府の寺社奉行の記録。『祠曹雑識』より「新田義貞遠忌」。

祠曹雑識（全72冊）とは、間部詮勝（1804～1884年、鯖江藩主、幕末の1859年に老中首座に就任）が寺社奉行（1830～1839年）の在職時に、家臣麻谷老愚に編集させた寺社奉行の訴訟書類・見聞記事・沿革考証などの大部な記録。その中に、称念寺に対して江戸幕府が新田義貞遠忌を指示・資金援助したことが記載されている。

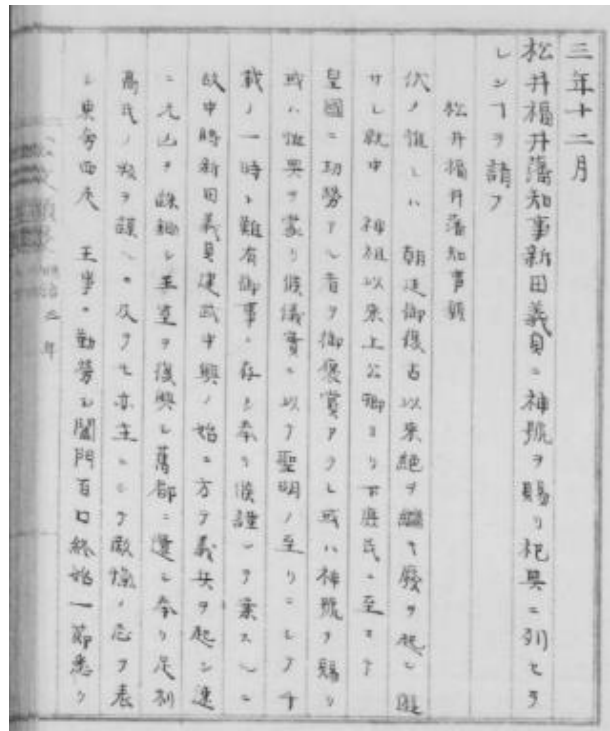


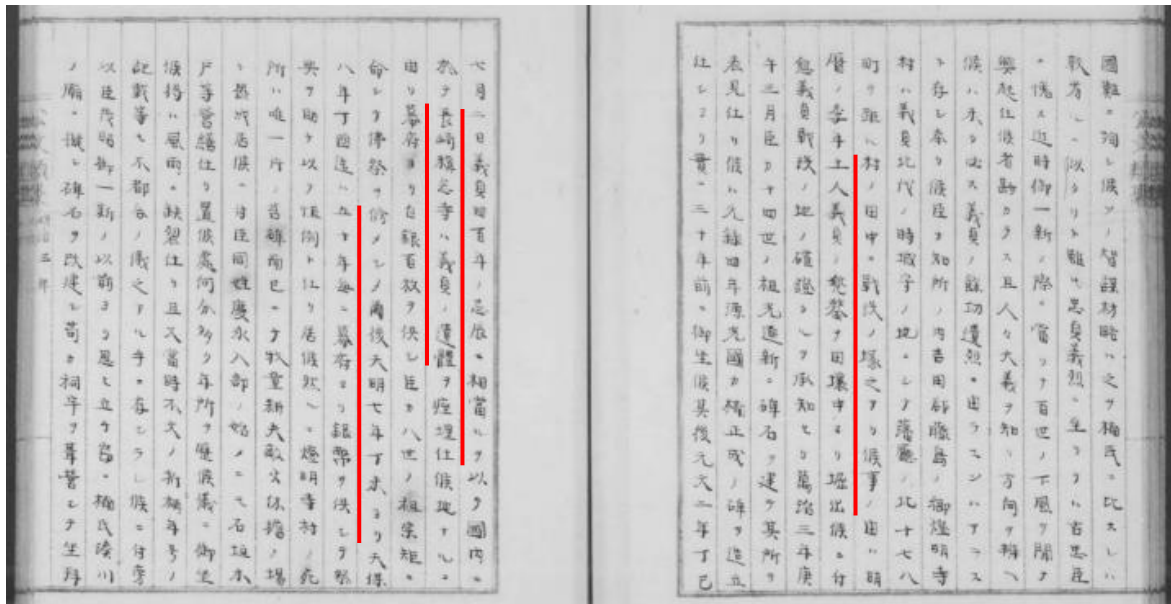
国立公文書館  
National Archives of Japan

祠曹雜識（『国立公文書館デジタルアーカイブ』より）

②福井藩知事から太政官政府に新田義貞神号の下賜を請う。

明治初期の日本政の記録には、明治3年12月、福井藩知事の松平茂昭（1836～1890年、最後の福井藩主、侯爵）から明治政府に願い出た文書に、称念寺に埋葬の経緯、新田義貞遠忌の実施を記載したことが記載されている。「福井藩新田義貞二神号ヲ賜ヒ祇典ニ列セン事ヲ請フ」（『太政類典第一篇』慶応三年～明治四年、第二百二十四巻）。





太政類典・第一編・慶応三年～明治四年・第二百二十四卷・教法・神社三  
 (『国立公文書館デジタルアーカイブ』より)

⑥酒づくり

久保田酒造は、市内唯一の造り酒屋である。久保田酒造では自社で栽培した米、敷地内に湧き出る地下水を使うことで、こだわりをもって日本酒を作っている。



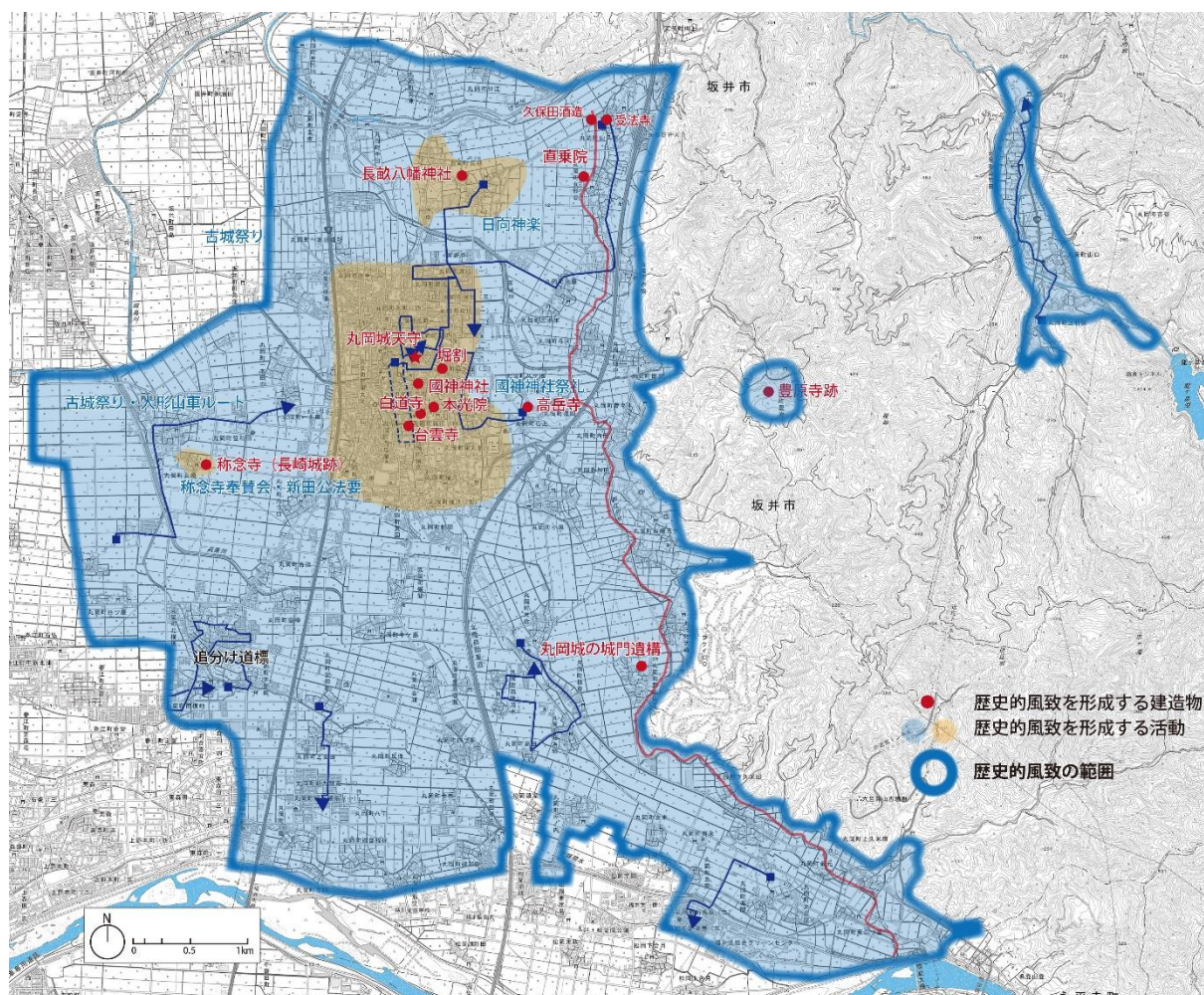
久保田酒造 酒蔵開放の様子

(4) まとめ

丸岡城周辺においては、城の遺構として天守に加えて外堀の一部が残り、また、菩提寺など、藩主ゆかりの寺社が点在している。長畝八幡神社の秋祭りでは有馬清澄が丸岡に移封の際に伝えられたとされる日向神楽が演じられ、また、丸岡城の築城とともに現在地への移転された國神神社の秋の祭礼で神輿が町内を巡行するなど、城下町としての市街地の様子を現在に伝えている。

藩主ゆかりの場所は、城下町周辺に広がっている。丸岡城の歴史を住民により継承していくことを目的に毎年10月に実施されている丸岡古城まつりは、丸岡城を中心として旧丸岡町全域の住民が参加する。毎年、各地区の持ち回りで、藩主を模したからくり山車人形行列が、小学生が太鼓を奏でる音とともに練り歩く。

城下町のみならず広範において、丸岡藩主の歴史と城下町の風情を感じることができる特徴的な歴史的風致を形成している。



歴史的風致の範囲